

大学卒業3年目の風景

－女性の20代研究・その5－

工藤 保 則

本稿は、「女性の20代研究」の一環として、工藤(2005, 2006, 2007, 2008)に続き、「地方出身で都市の大学に進学した女子大学生」だった3人への、大学卒業後3年たった時に行ったインタビューをまとめたものである。インタビューでは、主に、仕事のこと、家族・恋人のこと、将来のことについて語ってもらっている。

キーワード：仕事、ライフコース、都市と地方

1. はじめに

本稿は20代女性の「仕事」に焦点を合わせたものである。最近、「仕事」に関しては「非正規社員」や「派遣社員」についてのことが大きな社会的問題となっているが、ここではそれではなく、大学卒業後に正社員として働いている女性を対象としている¹⁾。そしてさらにいえば、そもそもは地方出身者で都市部の大学に進学した女性を対象としている。

そういう女性の仕事に対して、20代の10年間の継続的インタビューをすることでローカル・トラックとジェンダー・トラックの交差する観点からの考察を行いたいと考え、4年前から研究を始めている²⁾。本稿は、その一環として行った大学卒業後3年たった時点でのインタビュー結果を示したものである。

2. 調査対象者の紹介

本研究におけるインタビューの対象者は、石川県小松市出身の広部理華、福井市出身の青木理恵、岐阜市出身の宮腰英理の3人である³⁾。彼女らは出身県は異なるが進学した大学・学部・専攻は同じである。筆者はこれまで、その3人に対して、21歳時である大学3年生が終わった時点、22歳時である大学卒業の時点、23歳時である大学卒業後1年たった時点、24歳時である大学卒業後2年たった時点でインタビューを行い、その結果を、工藤(2005)、工藤(2006)、工藤(2007)、工藤(2008)として発表してきた。ここで、それらについての簡単な紹介を行っておく。

工藤(2005)では、10年間の予定で行うこの研究の問題設定、位置づけ、視点を示した。その上で、インフォーマントの紹介をかねた小中高時代のこと、3年生までの大学生活のこと、就職活動のこと、等についての3人へのインタビューの結果を示した。

工藤(2006)では、主に、実際の就職活動のことについてのインタビューを行った。インタビューの時期は卒業式後の春休みであったため、既にそれぞれの進路は決定していた。広部は製薬会社への就職が決まり(インタビュー時は赴任地は未定であった)、宮腰は名古屋市にある大手携帯電話会社への就職が決まっており、岐阜市の自宅から会社に通うことにしていた。青木は、

福井市に帰って医療系の専門学校へ進学することが決まっていた。就職する二人は、希望した企業への就職であり、専門学校に進学する青木も含め、それぞれの話からは、高校までがんばって勉強をし、大学でも勉強・キャンパスライフともにガンバって充実させ、就職活動（進学）にもがんばって取り組んできた、という、がんばることが得意な彼女たちの姿が見て取れた。

工藤（2007）、工藤（2008）では就職1年後（進学1年後）、就職2年後（進学2年後）に行ったインタビュー結果を示した。大きなライフイベントである就職活動をおえ、「自分にあった仕事」「自分のやりたい仕事」と思えた職業につくことができた彼女らは（青木の場合は、それにむかうための進学）、その後、実際の職場（学校）ではどのように感じながら働いている（学んでいる）のだろうか。そのことを捉えようとしたインタビューからは、やりたい仕事についてだけではいわゆる自己実現には至っていない彼女らの姿を見ることができた。当然のことながら、職場において何をどうすれば自己実現につながるのかわからず、まずは目の前のことをこなしているといった状態であった。だが、そのときに「この先には何かあるのだろう」という気持ち、いわば「仕事の中の曖昧な希望」ともいうべき気持ちを持ちながら、目の前のことに取り組んでいる様子が捉えられた⁴⁾。

3. インタビュー調査から

本節で示すインタビューは、就職（進学）して3年目が終わる頃のものである。ここでは、主に、実際の仕事（勉強）のこと、家族・恋人のことなどについての話を聞いている。

1) 広部理華インタビュー（2008年3月2日）

金沢への転勤

転勤になって、4月10日から金沢ライフが始まりました。地元なんですけど、まあ1人暮らしというのもあって、慣れるまではドキドキしていました。でも、年の近い先輩も多くて、7月には後輩の女の子も入ってきて、よくご飯を食べに行ったりして、楽しんでいます。同じ営業職で10人、それに所長と事務のお姉さん、みんな合わせて12名です。みんな優しくて活気があって、居心地もいいです。

週末になると実家に帰って、家族と過ごしたり、地元の友達と遊んだり、以前に比べたら、生活自体がだいぶ変わりました。親の顔を見る機会が多くて、地元に戻ってきて良かったと思います。離れていても、どこに行っても、別にいいと思っていたんですが、帰ってきてみると、お母さんも事故後、仕事を辞めてしまって寂しい思いをしていたりして、私がいると元気が出るようです。

仕事に対する心構えの変化

就職するまでは、仕事内容に関しては、医療関係でいい仕事のイメージを持っていたんですが、やっぱり営業がきつくて悩んだ時期もありました。和歌山を出る最後の1年間そうだったので、モヤモヤしたものがあったんですが、こちらに転勤させてもらったことで、そういう甘えも許されないなと割り切れるようになりました。今までは数字のお願いとかも、忙しい時間を割いて会ってくれる先生に、あえてこんな迷惑をかけることを言っているのか、という迷いもありましたが、それが自分の仕事で、それをやらないと会社に悪いんだということが3年目になってやっとわかりました。自分で仕事をやりにくくしていたんだということがわかりました。

和歌山では、悩んではいましたが、自分の営業の数字は伸びていました。けど、金沢に転勤してからはいくらがんばっても伸びませんでした。だから、今期にこれだけ売り上げを伸ばさなければならぬという目標を達成するために、いろいろ無理したり、必要以上に多めに買ってもらったりしながら数字を作っていました。これまではそういう無理をすることが絶対にイヤだと思って、実際に「イヤです」とも言って、わがままを言っていたんですが、それを受け入れられるようになったというか、選り好みせずがんばれるようになりました。当たり前のことなんですけどね。ありがたい人事を受けられるのはみんなじゃなくて、わずかな人たちなので、会社に貢献しないと思うようになりました。

新人でまわっていて失敗をして、これではダメだったなと思っても、1回失敗してしまったところには行けなくなってしまったりして、新しいところでやり直せるなら、こうできたらいいなと思っていたところを今は活かしているの、仕事が身についてきているんだなあと思います。以前の闇雲にがんばっていたときと比べると、市場分析とか、ニーズにあった営業とか、考えながらやれるようになってきました。

就職したときの夢を見ていた部分はある程度すてないといけないというのがあるんですが、ある意味、夢のない仕事も割り切ってやらないといけないと言うか。例えば、人の命を預かっているものを売っているのに、値引き合戦をするとか、先生に「数字が足りないから買ってください」と押し付けるとか、そんなのはおかしいと思っていました。最近はそういう愚痴もなくなって、おかしいと思う気持ちも持っていないといけないと思いますが、会社員として働くときにはバランスを取っていかないといけないんですね。きれいな仕事と思いついでいたところがあったんでしょうね。あくまで営業は営業、表向きは人のために役に立つ仕事ではありますが、それだけじゃないです。先生にお願いして必要以上の量を買ってもらおうとしても、それは使うから買ってくれているわけで、そんなお願いをするのがイヤだと言うのは甘えですからね。嫌な言い方をすると、こなれてきたんだと思います。やっとスタートラインなのかもしれないですね。

弱音を吐きたくなくなるときも、身近に身内がいると思うと回復が早いんです。1回仕事をリセットして、見つめ直す機会が持てたのも、異動できたからだと思うし、感謝しています。あのまま和歌山にいたら、こんなことも思えないほど腐っていたかもしれないです。

夏に入社1年目の新人の女の子が入ってきて、私と同じように1年間は薬の勉強をしていたので、最近営業にまわりだしました。初めて同性同士で、ライバルではないですけど、負けてはられないなと刺激を受けながら、いい意味で背中を押されているような気がします。また、上の人からも信頼されてまかされる仕事が増えてきたように思います。

今までなら、なんでこうなんだという不満だけを持って、そこから先がなかった気がするんですが、不満を受け入れつつがんばっていけるようになったというのが、この3年間の変化ですね。仕事を受け入れられるようになったんでしょうね。

今後の仕事、会社について

これからの変化を考えると、後1年は今のエリア担当で変わらないと思うのですが、金沢の中でもエリアが変わるという異動はあります。それと、今は開業医の先生を担当しているのですが、次のステップとして、地域の総合病院を担当するというのがあります。やはり大きい病院で使ってもらえると、他の病院への波及効果が大きいですから、いろんな形で自分の仕事に変化をつける機会はあると思います。

業界内で給与の平均や賞与の額とか、いろいろあるんですが、今、制度改革中で住宅手当の額

が下がったり、家族手当の配偶者分が出なくなったりしています。20代後半から30代前半の人たちが、同じ業界内で転職をされていて、待遇の良いところに流れているんですね。うちはずっと中堅でやっていますが、新薬がなかなか出ない。そうすると薬価は2年に1回改正があって減っていくので、売り上げも落ちてくる。すると働きやすい会社を求めて出て行ってしまう人が増えるんですね。この会社にずっといていいのかなという悩みをみんな持っていると思うのですが、私の場合は今回の異動があったので、簡単に辞めるわけにはいかないんです。でも、不満はそれなりにあるので、転職を選択肢に入れられない分、どうしたものかなと思います。ちょっと上の先輩で仲良かった先輩も辞められたりしていますし、そういうのを見ると考えてしまいますね。できる先輩がどんどん辞めていくのは残る側としては不安に思います。優秀な人ほど治験の仕事に変わったり、コーディネイターになったりしています。

大学のときの友達で、銀行に入った友達、アパレルに入った友達は仕事をやめていますね。同じ業界の友達もやめている子はいます。やめる子にも2種類いて、この業界があっという間に同じ業界で転職するためにやめる子と、この業界は合わない、やっていけないということで、他業界に転職する子ですね。どちらも多いです。私は今すぐこれをやめてこれをやりたいという仕事がないので、今見えているところでやっていければ続けて行きたいと思っています。会社にとって都合の良い1人になってしまっているような気がしますけど。

地元に戻ってきて、ここから先に異動があっという間に地元を出ることになったら辛いとは思いますが、もともと帰れるはずのない異動だったので、しょうがないとは思いますが。でも、このままいられるならこのまま働きたいですね。地元だけ金沢なので、知らない人ばかりなんですけど、ちょうどいい距離感なんです。本当に実家近くが担当になったら知っている人に営業しなくてはならなくなるわけで、それはそれで知っている人相手というしんどさがある。今は地元だけど、知らない人相手なので、ちょうどいいですね。

異動とか、先は見えないです。転勤はあり得ない話ではないですね。その時に結婚しているかどうかもありますね。結婚して、異動希望を出しながら仕事を続けるかとか、そこで辞めてしまうのかとか、悩みは尽きないです。

30代の自分、それ以降の自分

前に「沖縄に行きたい」という彼とは別れたという話をしたと思うのですが、その人とまた付き合いだしたんですよ。6月くらいに同期の集まりがあって、話をしていたら、「この人もこの人なりに悩んで、いい意味で変わってきているな」ということがわかったんです。都会育ちでそのまま都会の大学を出て、就職して初めて田舎に来たという人もいますし、私みたいなタイプもいますし、それぞれが違うんですね。大阪の生活にも慣れるのが大変だったのに、それにも慣れてきて、えらいなあと思えました。私が割り切れずに逃げていた部分の仕事も、ちゃんとやろうとしていたからこそ悩んでいたみたいです。そういうのがイヤになって「沖縄に行きたい」と無茶を言っていたんでしょうね。

もともとは気が合う人だったし、私も金沢に戻ってきて慣れなくて仕事がしんどかった時に、「気が合う人というのはそうそういないな」と思えたんです。環境的にも厳しかったでしょうし、同じようなことをしていたような気持ちでいたのに、彼のほうがはるかに先に行っていて、彼は考えを改めて、いろいろがんばって、キャリアアップして、この4月から大阪内の異動なんですけど中央営業所に行って、大きな病院を持つことになったんです。彼は疑問を持ってはいるんですが、病院を任されて、大きな仕事をしているので「当分は辞めない」と言っています。このまま

もし結婚ということになれば、お互い転勤族ですから、どうなるのかなと思います。同じところで異動希望を出したとしても、同期なので、同じところで働かせにくいですね。

結婚したときに退職ということになるかもしれません。これから先、どんな生き方でもできるかなと、今は前向きな気持ちなので、こだわらなければずっと働き続けることはできると思います。30歳になっても、どこに行っても、仕事はできるだろうと思っています。後は人生の成り行きに任せて、その時々仕事をやるようにしていけばいいんじゃないかなあと。全くイメージが固定できないような状態です。結婚抜きにしても、この仕事をしているイメージが湧かないのと同じですね。自分主導で決めてきたつもりで、結局入ってからは決められたことの中でやっていく感じです。

今年は自分主体で仕事をしていきたいと思っています。去年は慣れることに一生懸命な1年でしたし、今年1年は結婚しない、辞めないとなると、とりあえずは目先の目標しかなく、とりあえず仕事をがんばるという感じですね。これでまたさらに1年となるのかと思うと、それでいいのかという悩みはありますが、他の仕事を考えるときに、母の知り合いの人で教師の常勤にならずに、講師ですとやっている人がいて、「旦那さんが転勤族で、働き場所を定められずにやれるのがいい。他の先生と気持ちは変わらないし」と言っている人がいたんです。教職を活かすことは全然考えていなかったんですが、そういう働き方もあるのかと思いました。その人がすごく優秀な人だということもあるのだと思うんですが、なるほどなと。正式採用にならなくても、教職の資格を持っていたら、そういう働き方もあるんだなと思います。大学時代にがんばって取ったものは活かせるならば、活かされたほうがいいんじゃないかと、資格がピカッと光って見えます。これだけやったらこれだけもらえるという割り切った時間契約での働き方もいいのかなと思っています。

働くということ、自己実現

自己実現というものがあるとして、今はその過程ですね。まだまだ途中です。2年以内には今の仕事で「これだけやりました」「これだけできました」というものを築いておきたいと思っています。当面はその目標を目指してやります。例えば、彼が業界内で転職しても、同じ会社に勤め続けているとしても、全く違う業界に転職しても、それはそれと思えるようにしていきたいと思っています。

働くとは生きていく上で大切なこと、必要なことで、必要なことだからこそお金を稼ぐことだけじゃなくて、仕事の上で自己実現をしていこうと思います。働かないと生きていけないと思うんですが、「働かなくても生きていけるよ」と言われても、働くと思います。お母さんを見てみると働くことは義務ではなくて、権利なんですよ。働けるってことは幸せですよ。

家族のこと

お母さんは家でゆっくりしています。今はおばあちゃんを見ないといけなくなったので、働けなくなっています。おばあちゃんは、食前食後、朝昼晩、たくさんの種類の薬を飲んでいるんですが、薬を飲まないと命にかかわるのに、それをまとめて飲んでしまったり、飲み忘れたり、身近で見ている人がいないと危なくなってきました。家からまったく出なくなっていますし、おばあちゃんのことには本当に心配で、大丈夫かなと気になります。薬の管理はいろいろ工夫して、仕切りを作ってみたり、袋に書いてみたりしたんですけど、それでもダメなんですよ。 「おばあちゃん、薬飲んだ？これとこれを食前に飲むんだよ」と言って渡さないで正しく飲めないです。

GWにはお母さんと海外に行こうかなと思っています。ただ、おばあちゃんが見ていないと薬も飲まないし、ご飯も作らないので、誰が家で留守番するかが問題ですね。お父さんにお問い合わせするか、弟達に帰ってきてもらうか。お父さんが休みをなかなか取れないみたいなので、お母さんが行けるかどうか、難しいです。上の弟は教員として中学校にいます。下の弟は大学に入学したてでGWに帰ってくるのかもわからないです。ね。

2) 青木理恵インタビュー (2008年3月2日)

こどもセンターでの治療実習

6月～7月の1ヶ月半の治療実習が始まりました。治療実習はこどもセンターという施設でした。これは本当につらかったです。今までの院内実習でも3ヵ月間くらいかけて、整形と中枢と小児との3つを、グループでリレー実習のような感じでやってはいました。でも、私は小児という分野が初めてで、大人と病気も治療も違って、初めてのことばかり、全てが手探りででした。

脳性まひの子どもの場合だと、自分で「ここが痛い」とか「ここがしんどい」とか言えないわけです。そうなると評価自体も難しくなって、自分で観察するしかない。目標設定も高齢者の場合は今までの生活を円滑にしていくということでしたが、小児の場合はこれから成長していくわけで、とても難しいんです。脳性まひの子どもの場合、脳の障害もある、筋肉や骨の障害もある、それにプラスしてこれからの成長を考えていかないといけないわけです。大人だとここまで疾患が複雑に混じっていることはありませんから、戸惑いました。認知面がはっきりしていれば、こうして欲しいという指示に従って、普通にリハビリができるんですが、子どもの場合にはこれが難しく、自分のハンドリング、実際の動きを見てもらって促すようにしなければなりません。これが私には全く技術がないのでとても難しかったです。

実習が終わってしばらくたって考えると、行って良かったと思います。ここに1回行っただけで、考え方がすごく変わったなと思います。これからどこに行くとしても視野が広がりました。担当の先生が全国でも有名な小児の先生だったんですよ。だから、その先生から多くのことを学ぶことができました。ハンドリングとか、子どもが嫌がる触れ方とか、話しかけ方も教えてもらったし、その先生の全てが勉強になる感じでした。

病院での実習

8月の半ばからまた実習が始まりました。県内の病院に行くことになりました。主に担当したのは脳梗塞の後遺症のある方でした。その患者さんは、急性期の発症直後から見られたので勉強になりました。一番大きな動脈がやられて、梗塞が起きた範囲が広がったので、症状は重かったです。発症初期から立たせて歩かせるという主義の病院だったので、まだ立てない状態でも歩行装具をつけて歩かせるんです。本当に最初から脳梗塞の患者さんを診たのは初めてでした。回復の過程を学ぶことができました。

私の時間も治療として、先生と二人三脚でやりました。職場の雰囲気がとても良くて、PTも17人くらいいました。若いPTも多く、私を担当してくれたPTの先生も1つ年上の26歳でした。私と同じ年代の人も3、4人いました。親しみやすい職場でした。ね。

実習をこなして、自分のやりたい方向がわかってきた気がしました。目指す方向ですね。ここは脳卒中と整形と2つに分かれていたのですが、30代後半の脳卒中の先生がとても技術の高い方で、丁寧に可動域練習、ストレッチなんか時間にかける先生でした。「急性期に機能面を維持することが大事で、次の回復期の病院に移ったときに、そこをきちんとしておかないと、歩くと

かトイレに行くというような活動レベルの動作がうまくいかない、今わからなくても次の段階でその効果が見えてくるんだ」ということを言われました。まず大事なのは機能面だということを知ってもらって、本当にそうだなと思いました。技術面でも教えてもらうことが多くて、ためになりました。朝、カンファレンスがあって、医者が集まるんですが、そこにPTも参加して、入院してきたばかりの患者さんをどういうふうに診ていくかということと話合います。それに毎日出ているとどういう治療方針でやればいいのかということもわかりますし、医者の判断のすごさもわかる。最初はちんぷんかんぷんだったことが、段々理解できるようになって、予測がつくようになるのは嬉しかったですね。

整形の実習

10月半ばから3回目の治療実習が始まりました。3回目は県外の市民病院に行きました。そこは整形がメインの病院でした。私はそれまで整形をやっていなかったの、とても勉強になりましたね。膝の変形性膝関節症の患者さんを受け持ちました。よくある高齢者の肥満の女性に多い疾患です。

担当のPTの先生がまた優秀な方で、歩いている姿を見ただけでどこの関節、どこの筋肉が弱っているかがわかるんです。動作分析というんですが、それができるようになれと言われました。1番文献をたくさん読みました。文献やエビデンスが参考になる分野ですが、やっぱり人はそれぞれ違うので、その通りにはならない。ではどこが違うのかということを観察しなければならないんです。

整形と小児と中枢と、どれも面白いこと実習に行けたのが、本当に良かったです。同じ学校の子どもどうしても偏った実習になる子がいるんですよ。私は運が良かったですよね。

国家試験

年明けからは国試の勉強に入るわけですが、これがまさしく受験勉強で、朝9時から夜の9時までずっと図書館にこもりきりでした。1月いっぱい週3回午前中に国試対策の授業もありました。後はグループ学習で、グループでやることを決めて好きに勉強を進めるという形、それと個人での勉強ですよ。

勉強はやりましたよ。テスト自体は専門問題を2時間半かけて解いて、午後は共通問題を3時間半かけて解きます。午前180問、午後100問です。選択肢が5個あるので、量が多いんですよ。模試をやるだけで、すごい疲労感です。今までやってきた3年間の勉強を凝縮した感じのテストで全てが入っています。3年間で勉強したのは30科目なので、それが全部となるとスゴイですよ。過去問以外にも教科書に戻って復習して詰め込んでいくんですが、症例や図が出てきて「この患者にはどのような治療をすれば良いか」と言うような問題も出るので、実習で学んだ知識も必要でした。今までに1番勉強した3ヵ月でした。この国試で覚えたことがこれから働く知識の裏づけにもなるんだなと思いました。3月2日に大阪で国試がありました。全国8,000人の受験生がいました。4月7日に発表で、落ちたら就職できなくなりますよね。ドキドキですよ。

就職活動と春からの生活

就職が決まったのは10月のはじめでした。県内なら先生に「ここを受けたい」と伝えて、1つのところを受けたら、その結果が出るまでは次を受けられないんです。だいたいみんな希望のところが決まっていた。私の場合は県内ではなかったので、先生も全く情報がありませんでした。なので、8月の1週間の休みに大阪、京都に行って、1日2つの病院の見学を予約し、9つの病院を見て、条件や方針が良さそうなところを1つ受けました。それが今度お世話になる病院

です。

就職は結構悩みましたね。大阪か京都かどちらかとは考えていたんですが、実習の最中に病院を決めないといけなかったのも大変でした。評判も全くわからないので、まず自分の条件を出しました。まず地域は大阪市か大阪の京都寄りの市、それと京都市全部ですね。あまり小さい病院はイヤだったので、200床以上のところを選びました。PTの数も多いほうがいいですし、それと給料とお休み。彼との休みの兼ね合いを考えると、日曜日は確実に休めるところが良かった。お世話になる病院は600床以上あるんですよ。京都でもかなり大きな規模の病院で、PTも30人くらいいます。

3年の6月くらいまでは両親も「福井で就職したほうが良い」と言っていたんですが、彼も私の家に来て話し合っ、て、「結婚を前提にして就職は関西でさせて欲しい」という挨拶を親にしてくれました。彼はいま1年ごとの契約で教師をしているので、すぐに結婚ということはないんです。彼はまだ教採を受けたことがなくて、今年は受けてみようかと言っています。でも、本当は私学の先生になりたいみたいです。今の学校は2年の約束で休学している先生のピンチヒッターなので、その先生がもし2年で帰ってこなければ採用してもらえらるみたいですけど、どのくらい可能性のある話かはわからないので、教採も受けてみる気になったみたいです。

1月くらいに高槻に2LDKの家を借りて、春から一緒に住むことになっています。3月30日に結納をして、入籍はたぶん6月くらいになります。式はまだ全然決まっています。家は11月に京都に実習に来たときに私が探しました。駅から歩いて10分くらいのところにあります。

この3年間を振り返って

この3年間順調にきたとは思いますが、想像と違ったのはPTがこんなに大変な仕事だとは思っていなかったということですね。これからも一生勉強していかないといけないし。でも、ずっと色々な実習や勉強を続けてきて、PTを選んで失敗したなと思ったことが1回もなかったんです。PTの限界の話なんかも先生に聞いてわかってはいたんですが、それでも思わなかった。だから専門学校に進学して良かったなと思います。人間関係も、勉強も、本当にこの3年間は充実していました。

1年目は基礎科目と言って、実技も少なかったですし、座学中心の今までとあまり変わらない勉強でした。それが実技が始まって、実習が始まったら、学んだことが活かせるようになって、実際の治療に結びつくことがわかって、勉強もさらにがんばろうと思うようになりました。2年の半ばくらいから院内実習も始まって、最初は治療というよりも患者さんに評価させてもらっているっていう感じでしたが、この1年で役に立っているという実感も持てるようになってきました。2年生まではしんどくて辞める子もいましたけど、3年目はそういう子もいなくなっていましたね。患者さんとも人間的な付き合いができるようになりました。

いろんな葛藤もあるでしょうし、働き始めたら違うのかもしれませんが、でも今は本当に良かったです。実家近くの専門学校に通ったのも正解でした。このハードな勉強をして、なおかつ家事もして、となると大変だったと思います。

大学3年のときにPTを知って、この道に進めていて良かったなと思います。大学のときは漠然と教育関係のところへ進んで、子どもと関わって行きたいと思っていたんですが、それとは全く違う選択ですよ。でも結婚して転勤とか、場所を動くことがあった時に、教師とか公務員だとそれでおしまいというか、続けるのは難しかったと思うんですが、PTだと国家資格なのでどこでもできると思うので。PTは先生と呼ばれる立場でもありますし、患者さんの体調や訴えを

聞いて、それでプログラムを組んでいく、教師的な面もすごくある。だから、大学でやってきた勉強と同じ道ではあるのかなとは思いますが、大学の勉強と子どもの居場所作りのボランティアとPTという職業はミックスされている気がします。親の職業の影響もありますね。

30代の自分、それ以降の自分

これから家事と仕事を両立していかなきゃならないので、そういうのは大変だろうなと思います。彼は半分やると言っているし、彼のほうが早く帰ってこられるので、きっと恵まれているんでしょうね。彼は7時半には帰ってこられるので、ご飯作って待っていてくれると思います。今までは親が全部してくれていたもので、それでも大変にはなるかとは思いますが、後は私が彼の仕事が決まるように、ハッパかけていくしかないですよ。

彼がきっちり就職が決まったら、私は3年くらい病院に勤めて、その後は家の近くの病院に転職できたらと思います。そうしたらもっと通勤も楽になりますし、3年勤めたくらいで子どもを1人産みたいなと思っているので、30歳くらいには1児の母になれていたらいいですね。なるべく早く復帰して、近くで子どもを育てながら勤められるところがあればいいなと思います。4歳の自分の予想は、難しいところで、彼が長男なので両親に介護が必要となれば、もしかしたら故郷に帰らないといけなと言われるかもしれません。私の希望としてはいずれお互いの通勤に便利なところに家を建てて、子育てをしながら仕事をしていきたいと思っているんですけどね。

家族のこと

大学で親元を離れて、また両親のところに3年間いたので、また故郷を離れていくことに対しては両親はさみしそうですね。両親はこの3年、静かに見守ってくれていました。私が忙しすぎて心配はしていたみたいですが、あまり口出しはしませんでした。私はたぶん勉強したことを患者さんに返して、患者さんが良くなっていくことを一緒に喜べてということが生きがいになっていくんだと思います。それと家庭ではお互いが幸せで仕事以外も充実していくということ、この2つが安定していくことが大切なんだろうと思います。

3) 宮腰英理インタビュー (2008年3月16日)

静岡への転勤

私の会社の人間にとって、岐阜や三重への転勤というのは名古屋から通えるのでそんなにショックではないんですが、静岡となるとちょっと違うんですね。私も呼び出されて「静岡だよ」と言われて、やっぱり泣きました。私としては本社に行って東京のほうで試作を考えたり大きなプロジェクトに取り組んだりというステップを踏みたいのに、それが遠のいたような気がしたんです。でも結果的に同期を見てみたら、全員支店に配属されることになっていて、私だけではなかったんですね。前の部署から早めに出してくれたということは、上司からの「早くお前は一人前になって、上に立って行け」という指示であって、その気持ちも伝わっていたので、ある意味で満足ではあったんです。それが4月はじめのことでした。

代理店営業という仕事

私の担当地区が東部方面なんですね。三島とか、伊豆とか、沼津とか限りなく神奈川寄りなんです。東京に出るほうが名古屋に行くよりも近いですし、皆さんの意識は名古屋に対してよりも、東京に対してのほうが強いです。会社から三島までだと、往復150キロを営業車で走らせるわけですよ。下田の店舗など、静岡の先端部分の店舗も担当として持っていて、そこまで営業に行かないといけないんですよ。もう慣れましたが、やり始めた当初はしんどかったです。営

業のノウハウはないので、ついていって学んでいきましたが、すごく苦勞しました。

その原因は、私の負けず嫌いな性格です。人から見られた時、例えば上司から見られた時に、他の代理店営業1年目の人と比べて「こいつは覚えるのも早いし、できるな」と思われたい。これはその時に自己分析してわかったことなんですけど、私はそういうふうに常に思っている。だから、必死にやるわけですよ。成果を残さないといけないし、1度言われたことは完璧でなければいけないし、期日もきっちり守らなければならない。

赴任当初から言いたいことは言っていて、課長もそのせいでびくびくしていました。「俺、悪いことしたかな」とか言われるんですけどね。前の部署でもそうでしたが、たとえ上が言ったことでも、間違っていることは「間違っている」と言うような性格なんですよ。だから、言われたことはやるので、自分が思ったことや言いたいことを言えるような環境を作っておきたい。そのためには仕事ができないと言えませんよね。そうすると自分を追い詰めるわけです。誰もそこまでは求めてこないわけですよ。「そんなこと求めていないし、ゆっくりやればいいよ」と言われる。でも私は「ゆっくりでいいよ」という土壌でさえも腹立たしくなってくるわけですよ。なんでそう「がんばらないでいいよ」と言うのか、と。

全体的にそうなんですけど、目標があって、それが達成できないからと言ってペナルティはないわけですよ。私たちの場合って、目標は代理店さんの目標なんですよ。例えば販売にしても、持っている代理店がいくら上げたかという目標なんです。それをどうしていくのかが、私たちの仕事で、それが代理店営業やルート営業と言われる、弱みであり、良さであるわけです。そこがはかれる仕事なんです。自分たちの力で直接的にはなんとかできないという営業なんですよ。私の代理店さんはどこもがんばってくれていて、結果を上げてくれているんですが、「前任の人と比べて非常に熱い」ということはよく言われます。

私は各店舗のキーマンを半年くらいで見つけてきました。前任の営業がどのようにやっていたか知らなかったんで、全く固定観念なしに自分の営業をしていきました。それはどういうことかと言うと、店長であるとか、マネージャーとか、責任者に言っても動かないことって、現場に問題があるわけです。その辺の現場のヒアリングをいかにしていくかが大事だと思ったんです。いちスタッフ、窓口にいる人たちと話さないと進まないと思いました。本当はできる店長や責任者がいれば問題ないんですが、そういう人がいないから問題があるわけです。そういう話を懇々とスタッフさんにするんですよ。私という人間をわかってもらうために、くだらない話もし、人間関係を作っておくわけです。

スタッフさんというのは私とだいたい同年代の人です。ちょっと上の人も若い人もいます。当然のことながら育ってきた環境も違うんですよ。派遣さんもいれば、契約社員さんもいる。そういう人たちの気持ちとか立場になって考えるときに、非常に良かったなと思うのは、大学で教育を学んできたじゃないですか。それが生きるなど、全てのことに通ずるかもしれないんですが、相手がどう思っているかということを考えてあげないと事は進まない。そこまではわかったんですが、その人たちを動かすにはどうすればいいかというところまでは、わかっていません。大学で教育を学んでいる、その子たちに、全て学ぶことが活かしているんだよということを教えてあげたい。

一方で勉強不足だなと思うのは、人を動かすということですよ。いろいろチャレンジはして見ますが、なかなかうまくはいきません。人を動かすのってそういうことなんだろうなと思います。自分でさえも変えることは難しいのに、人を変えることはもっと難しい。会社に貢献する

とか、働いて成長していくとか、そういう考えに全く共感できない人もいますよね。そりゃそうですよね、彼女たちにすれば、同じ給料で同じ時間働くならラクをしたい。バイト感覚なんですよ。でも、もっとしっかり働けば、社員にだってなれるかもしれないし、そうすれば給料だって上がる。もっと長期的な目で見たい。例えばバイトでもそうなんです。短期的な目で見れば、就活のとき、どのようにバイトで働いてきたかでアピールできることも変わるし、長期的な目で見れば、会社に入ってから働き方にも影響するんですよ。その点を訴えていくのも難しいし、それを現場レベルの人間がわかってくれたとしても、現場の責任者、店長などが売っていきいたいと思えるようなことができないわけじゃないわけですよ。

それがわかるようになったので、静岡に来て良かったなと思います。よく言われるのは新人から本社にポッと来ちゃうと、机上の空論だけになってしまう。あくまでも数値を見て、数値だけで判断するようになる。私は今、代理店さんとがんばりたいがゆえに代理店さん寄りになってしまっていて、あまりシビアなことを言えていません。でも、そういう所が大事なんだろうと思いつつ営業しています。

チューターとして新人研修へ

別件で、採用のほうからの話があって、新入社員を軽井沢に集めて1ヶ月研修するんですけど、そのチューターをやることになりました。東海から1人チューターを出すということで、私が選ばれました。

チューターになる人たちだけを集めて、2月に事前研修がありました。九州から北海道まで集められた人たちで、くだらない会社のルールの話からいろんなことを話し合ったんですよ。そもそも何を彼らに教えていきたいのか、伝えていきたいのか、という話を3時、4時までしました。私はチューターの話をしていただいた時に、「行きたいな」とは思わなかった。何でかと言ったら、飲み会だけでワイワイ騒ぐだけの人間だけが集められているような印象があったんです。そうであれば私は興味がなくて、他の人間の方が適材だろうと思ったんですが、みんなで集まった時に、私が一番若くて、30過ぎて先輩なんかすごくしっかりしてるんですよ。当たり前なんです。論理的に物事を考えたり、会社にとって必要なことは何なのかということ真剣に語り合えるんです。そうそう「この人は違うな、頭が切れるな」と思う人っていないんです。でも全国から集まってきて、幅も広がると、やっぱりすごいですよね。みんないい大学も出てきているだろうし、仕事もできるだろうし、考え方もしっかりしてるんだなと感ずることができて、改めて「この会社はいい会社だな」と思うことができました。

「この会社に対する帰属心を増してくれ」と人事には言われたんですが、最近の子って、うちの会社に対するロイヤリティが薄いんですよ。私たちの頃って「いい会社に就職できたんだから、がんばってこのままいくぞ」という思いが強かったんですが、今の子どもたちって総じてみんなすごくいい子なんです。イエスマンで、安定を求めて就職してきていて、大人しいんです。私たちの世代はやんちゃだった。今の子どもたちって「なんでその行動をするの」って聞いた時に答えられない。「ルールがありますよ」と言ったときに、そのルールを受け入れて、なぜそのルールがあるのかということ考えない。ゆとり教育の子たちだからかもしれないんですけど、その辺のところを教えてやって欲しいと言われたんですよ。考えられる子が減ってきたのかも知れない。

研修は4月1日から1ヶ月泊まりで行って来ました。毎日みんなの日記を書いて、面倒をみてきましたね。そういうことを経験しながら、自分の仕事の在り方を見つめなおすいい機会になったなというのが現状ですね。

この3年間振り返って、大学時代もそうでしたが、自分の成長、自分さえってところが大半を占めていました。でも、研修を担当してみても、人のために何かをやることで自分の立ち位置も見えてくるし、これから4年目に入って後輩もできてきて、中堅のポジションにも入ってくるだろうし、「自分さえ成長すればいいんだ」というところから1歩出て、枠を広げることによって、自分の成長にも跳ね返ってくるんだろうなと思いました。本当はつらいんです。新入社員研修も授業が終わって、社長の講話とか、営業本部長なんかの話もあって、更にその後に授業もあって、夕飯があって、飲み会があって、12時に日誌を提出してくるんですよ。それを全員分書いていると、寝るのが3時、4時になる。それを毎日繰り返してやる。体力勝負ですよ。でも、チューター研修の時に、前年度のチューターから次期チューターへというメッセージがあって、それがとても熱くて、いい会社だなと思いましたね。

名古屋在住にこだわるわけ

私はつくづく疲れる人間なんだなとは思いますが、あの人にもこの人にもスペシャルでありたいと思うがあまり、全ての部分でがんばらなくてはならなくなってしまう。その役割に「もういいや」となる時もある。最近の私は新入社員の時のエネルギーを失ったのか、なじんできてやり方を見つけてきたのか、見方は2つあると思うんですが、今はいい人に囲まれて働いていると思いますね。

がんばり続けるには相当エネルギーはいるわけで、悔し涙を流したり、落ち込んだりもしますよね。そういう時に「いいんだよ」って自分の性格を知っている友達なり、親なりが支えてくれる。名古屋にいる利点はそこだと思います。同じような境遇の人が多いので分かり合える。いつまでも戦いあわなくていい。汚い言い方をすれば、優位なんですよ。地元に戻ってくる人って、ガツガツ働きたいとか、戦って勝ちたいと思っている人は少ないんですよ。だから、その中で働くのは優位だと。東京で常に戦わねばならなかったら、疲れるでしょうね。フォローしてくれる人がいて、孤独感がないというのは、プラスです。就活の時に、こちら辺って遅かったんですよ。だから、面接とか、グループワークとかにしても、みんなが慣れてなくて、弱かった。他のところでいろいろやっているのを磨き上げられてきていますもんね。その点では1回、大学のときに東海地方の外に出られて良かったですよ。そして、また名古屋を出るかもしれないという可能性が残せるのも、強みだと思います。

結婚について

先輩との付き合いはまだ続いています。向こうも名古屋に住んでいるので新幹線も一緒だったりしますし、知ってる人は知ってるというか、社内でもばれていると思います。12月くらいうちの親が「早く結婚しなさい」という話題が出て、向こうの親も「早く結婚したら」と言っているというので、両方の親の顔合わせをしたんですよ。だけど、彼氏は「顔合わせはしたけど、別にいいんじゃないの」という感じですね。うちの親は特に「早く結婚して欲しい」ばかりだから、「なんでしないの」とか「今年度するんでしょう」とか言うんですよ。私も「もういいかな」と思ったり、本気で仕事をしたいと思って、東京行きとかを考え出すと、結婚したらそうもいかないだろうと思ったり。子どもを産んで、働き続けてということ考えると、今の彼と結婚してというのはアリなんだと思うんですけど、親の期待を満たしてあげたいと思うがために、悩んでいます。

付き合い始めて2年半くらいだったので、確かに答えを出さなきゃならないのかなとも思います。大学院に入って、勉強し直して、という思いもまだどっかにあるんですよ。最終的にはそんな

ことをやりたいかなというのはありますが、結婚してそれを満たしてもらえらるだろうかと思うと、結婚したらお金も2人のものになるだろうし、自分だけというのは難しいだろうなと思います。そういうことも話し合っていないといけないし、理解してもらわないといけないし、今の人はそういうのを認めてくれる人だとは思いますが、

親は「早く子どもを産んで」と言うので、「ハイハイ」って言いつつ、どこかで選択肢を切っ
ていかないといけないだろうけど、いつまでもそれが切れない。大学の時の先生は、働いて、
子どもがいながらも、マスターとして、どんどん勉強されて、ああいう地位を確立されたんだと
思いますし、私のまわりで主婦の方でも大学院に行って勉強されている人もいる。彼氏と「人っ
て本気になればなんだってできるよね」という話をするんです。例えば私が今から医者になりたい
と思って、本気で勉強したら、できると思う。その本気度の問題だし、その可能性を否定した
くない。学びたいものを見つけて、それをやっていけば、いつまでも成長できるし、不可能なも
のではないと思っていますんですけどね。でも、それはずっと言っていたって、1つしか人生は選べ
ないわけで、目指すものを1つ見つけていかないと、最終的には全部を見失っちゃうよと思っ
ているんですが、その辺が難しいところですよ。

30代の自分、それ以降の自分

これからの人生、結婚はするんでしょうね。結婚したら今の会社にいるんだろうな。これは去
年も言っていたと思うんですけど。今の彼と別れて、違う会社に行けば、違う人と出会って、違
う可能性があるかもしれないんですが、結婚するなら、今の会社でスキルをつけて、その上で勉
強し直すのか、キャリアチェンジするのは別にして、この会社がベースになるでしょうね。全
く違う会社に行けば、結婚するかどうか分からない。今の彼がいいから結婚したいわけで、結
婚が目的ではないですもんね。きっとこの会社でいるんでしょうね。

30には子どもを産んでいるのかな。産んでいるのであれば、休職しているでしょうね。この会
社で子どもを産むのであれば、早めに産んで、早く復帰したいです。できれば1年とかも休みた
くないくらいです。結構、2年とか3年とか休む人が多いんですが、私は自分の親にも頼めない
し、相手の親には頼みたくないの、早めに保育所に入れて、復帰したいですね。専業主婦には
ならないです。

母親であることの良さを感じるのって、会社で働いていてこそだと思えますよ。子育てどっ
ぶりになると、いい面だけじゃなく、悪い面もいっぱい見えてきて、楽しめなくなると思う。会
社も、彼氏との関係もそうで、1つのことしか選べないからそうなわけで、母親だけをやるこ
とになったら、悪い面ばかりが見えてくると思う。会社も「自分には仕事しかない」と思っちゃ
うと、おもしろくなくなっちゃうと思うし。色んな役割を求められたほうが、自分は楽しめらる
んだろうな、と。

40、50の野望としては、愛読雑誌の『日経ウーマン』に載ることですかね。子育てしながらも
働きやすい仕組みを作ったり、会社の中でも中心的な役割を果たしていたりという、そんな人
として取り上げられたいと思います。若い人が目標にしてくれるような人間になっていたいと思
います。上司にも「お前の部下にだけはなりたくない」と言われます。だから鬼所長になっている
可能性もありますよね。

働くということ、自己実現

働くってというのは、そのことを通じて自分を知れるってことだと思います。働くことで、自分
自身ってこういう考えを持っているんだ、とか、こういう考え方の人とは合わないんだ、とかを

知っていく機会だと思います。そういう場に自分を置かなければ、自分が育ってきた家庭の中では、みんなが合わせてくれているわけですから、色んなことを体験できる場で、そういうところで成長できるんだということを知れる場ですよ。お金を稼ぐ場でもあるし、必要不可欠なものだと思います。苦しいけど、楽しい、と言うか、休みも欲しいんですが、休むと「これでいいのか」と思う。働いている時は休みが欲しいと思うし、月曜日のテンションは下がる。サザエさん症候群にはなるんですが、仕事に行くと「あそこの店舗はどうで、こうで」と考えて行動している間に、あっという間に1日が終わる。

自己実現は思い描いていて自分の像なり、役割なりを叶えていくことだと思います。結果はどうであれ、自分が満足感を得られることだと思います。結果ではなくて、その過程です。うまく言葉にできないんですが、

大学生生活もあれだけやったけど悔いがあるんですよ。だから仕事も一緒だと思います。

4. おわりに

就職（進学）1年目については、工藤（2006）では、（仕事とライフコース展望を重ね合わせて、その展望を）「確定とする前の待機状態といった段階」のようだとした。また2年目の様子については、工藤（2007）で「まだ、何らかの確定や決定を行うまではいかなくとも、自分自身のライフコース展望と『仕事の中の曖昧な希望』とのすりあわせを行っている、といった段階なのかもしれない」とした。本稿で示した3年目は、その「すりあわせ」をさらに具体的に行っているように感じられた。3人とも、20代半ばの女性として結婚ということを意識しながら、それと仕事との関係をどのように作っていかうかと考えていた。「会社を3年でやめる若者」ということが話題になるが、やめずに3年働くと、それから先のことも視野に入れての仕事ができるようになるようである（大学卒業後に専門学校に進学した青木の場合も、それとほとんど同じことが言えるだろう）。

次回のインタビューは、就職して4年目が終わったときのものになる。それぞれが自身のライフコースにおける何らかの確定・決定を行っているのか等について考えることになるだろう。また、それともかかわってくるが、これまではインタビューの結果を示すことを中心に行ってきたが、それに代わって、働くということについての理論的な検討や女性20代についてのライフコース論的な考察も行うつもりである。

注

- 1) 後で説明しているが、調査対象者のうちの一人は、大学卒業後に専門学校へ進学している。
- 2) ローカル・トラックとは「それぞれの地方出身者が、アカデミックな進路形成とは別次元ものとして、自らの地域移動について選択していく進路の流れ」のことをいい、「大都会には大都会のローカル・トラックがあり、地方にはそれぞれ固有のローカル・トラックがある」としている（吉川2001：223）。

ジェンダー・トラックとは、そもそも「学校組織を構成する女子教育観や生徒・学生の内面化する性役割観の際に基づいて、学校間で形成されている『層』構造のことを意味するものであり、学力水準に基づくトラックと同様、それに基づいて生徒・学生の進路を分化させる構造」（中西1998：12）を指して中西祐子が用いた概念である。またそれに対しては尾嶋・近藤（2000）では「中西（1998）は学力水準とは独立して性役割観に沿う形で分化する女子の進路分化を『ジェンダー・トラック』と

名づけたが、ここでは天野（1986：69-70）のいう『女性専用軌道』（female track）や木村（1999：37-38）のいう『ステレオ対応型の専攻』と同じ意味で、その進路や専攻に性による偏りがみられるものを『ジェンダー・トラック』と呼んでいる」（尾嶋・近藤2000：45）という別定義がされてもいるが、本稿では、後者の意味によって用いている。

3）インフォーマントの氏名や他の固有名詞については、一部変更している。

4）もちろんこれは、玄田（2001）や玄田編（2006）の言葉を借りた表現である。

参考文献

- 天野正子編，1986，『女子高等教育の座票』垣内出版
玄田有史，2001，『仕事の中の曖昧な不安』中央公論新社
——編著，2006，『希望学』中央公論新社（中公新書ラクレ）
吉川徹，2001，『学歴社会のローカルトラック』世界思想社
工藤保則，2005，「『女性の20代』研究序説」『仁愛大学研究紀要』(3)
——，2006，「大学4年生の風景」『仁愛大学研究紀要』(4)
——，2007，「大学卒業1年目の風景」『仁愛大学研究紀要』(5)
——，2008，「大学卒業2年目の風景」『仁愛大学研究紀要』(6)
中西祐子，1998，『ジェンダー・トラック』東洋館出版社
尾嶋史章・近藤博之，2000，「教育達成のジェンダー構造」『日本の階層システム 4 ジェンダー・市場・家族』（盛山和夫編）東京大学出版会